

教宣 せぶん

「いしはらくにお」という経営者

怒りで全身が震えました。仲間には「冷静に対応しよう」と促していましたが、そんな言葉はまったく思い出せませんでした。

この2週間総行動の締めくくりとして、各労組・団体から書いて頂いた600を超える署名を手に、会社に対して最後の要請を行なった6日午後4時20分のことです。会社は事もあろうにこの対応に、人事企画部の一番の若年者を一人で玄関前に立たせたのです。「判決を守れ」「社長に直接この要請書を手渡したい」「いままでの要請に対する社長のコメントを聞きたい」「玄関先ではなく中に入れて誠実に対応せよ」という私たちの訴えや声を、まさにあざ笑う行為でした。そして、何よりも立場の一番弱い者に、もっとも「つらい」対応をさせようとしているこの会社の石原邦夫という経営者に怒りが爆発しました。

この経営者は、合併以来、旧日勤の役員を追放し、月掛けを売り止めにし、旧日勤社の社屋を叩き売り、そして外勤社員制度の廃止を強行してきました。それぞれ、その時々で、「それなりの」「もっともらしい」理屈はつけられてきましたが、この経営者がすすめてきた合併以来の施策を全体から眺めてみると、そこには「日勤色の一掃」という共通するキーワードが映し出されます。私たちの契約係従業員制度の廃止の後には、抜本改革による旧日勤内勤社員への雇用破壊が待ち構えているのでしょうか。こうした、弱い立場のものを徹底的に虐げるといふ、この経営者のあくなき利益追求の「姿勢」、企業の社会的責任を果たさない「姿勢」、従業員を大切に扱わない「姿勢」、人権を守らない「姿勢」、判決にさえ従わない「姿勢」が、この一番立場の弱い者に、もっともつらい仕事をさせるといふ行為に如実にあらわれたと感じました。この石原邦夫という経営者はそうまでして「門前払い」という図柄をつくりたいのでしょうか。そうまでして自らの経営としての「プライド」を顕示したいのでしょうか。そうまでして自らの「こだわり」を守りたいのでしょうか。

顔面蒼白になっているこの若年者を見かねてか、段階的に立場の上の者が次々と現れてきました。最後に登場したグループリーダーが現れた時に、「弱い立場の者にこんなつらい対応をさせて、どうしておまえが最初から対応しないんだ」という強い怒りがこみ上げてきました。このグループリーダーを通してこの企業や石原邦夫という経営者が持つ「変なこだわり」に対して、残っていた体力をすべて傾けて徹底的に抗議したつもりです。この「2週間総行動」を通して、この企業体質、そしてこの経営者に対し「絶対に屈しない」という強い信念をあらためて手にしました。